

## 平城宮跡・平城京跡の発掘調査

### 平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は、1987年度に、平城宮跡内では朝集殿南西の兵部省推定地区、内裏東方の造酒司推定地区など17件（宮北方遺跡を含む）、平城京城内では左京三条二坊七・八坪（長屋王宮）などの7件、及び西大寺など寺院6件、計30件の調査を実施した。

#### 1. 平城宮跡の調査

**兵部省地区およびその北方（第175・185次）の調査** 奈良シルクロード博覧会の開催に伴ない、近鉄線上に設置された跨線橋の工事々前調査として行なった。調査区は、第1次・第2次朝集殿地区の中間南方にあたり、線路南側を175次、北側を185次として設定した。

**兵部省地区の調査** 175次調査では、167次調査でその南辺を検出していた朝集殿南西官衙の西辺の築地塀を検出し、当該官衙が兵部省であることがほぼ確実となった。

**A 期** 藤原宮式の軒瓦を含む整地土で調査区全域に及ぶ整地を施し、築地塀 SA13030A によって官衙域を設定すると共に、内部にさらに整地を行なう。堀立柱塀 SA13020で内部を南北に区画し、北に1棟の東西棟礎石建物 SB13000、南に2棟の南北棟礎石建物 SB12980・12990を配す。SA13030Aは基底幅7尺と推定され、西側に雨落溝 SD13025を伴なう。2ヶ所に門 SB13040、SB13050を開き、SB13040の前でSD13025は西側に張り出す。東西塀 SA13020は、柱間8尺（2.4m）で、西1・2の柱穴には径30cmの柱根をとどめる。北側雨落溝 SD13006は築地下を暗渠で抜けて調査区西方の大溝 SD3715に注ぐ。SB13000は桁行3間、梁行2間で、東南隅柱と東妻柱の礎石が原位置に残る。周囲には雨落溝が巡っており、河原石が落ち込んでいるので、雨葛石一段程度のごく低い基壇を形成していたと考えられる。SB12990は礎石根石を、SB12980は北妻柱列の礎石据えつけ穴を検出し、梁間規模は相等しい。SB12980・12990の東側柱列は柱筋

がそろい、東には共通の雨落溝 SD12995が通る。また SB12980は、門 SB13040の中心線を軸として、SB12990と南北対称の位置に配置されたと推定される。門 SB13040の中心線と東西塀 SA13020との距離は75尺（22m）である。

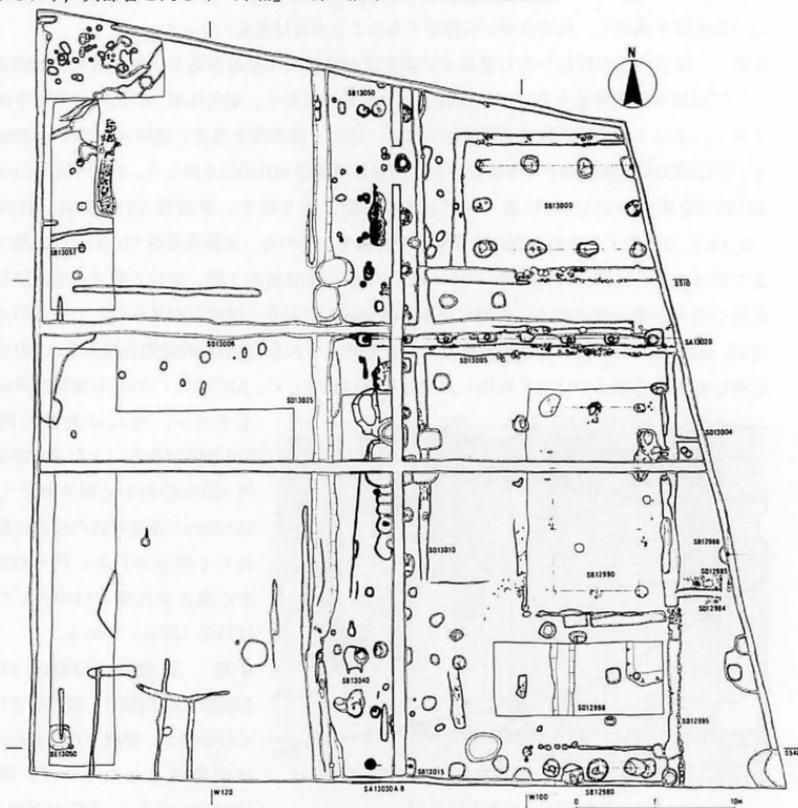
**B 期** 築地塀 SA13020B は、SA13020Aの東内側に、礎石列を付加して柱を建て、屋根を葺きおろして廊下の構造としたもので、雨落溝 SD13010を伴なう。礎石は築地心から



平城宮跡発掘調査位置図

10尺（3m）をへだてて、11尺（3.3m）等間に配され、調査区北方3ヶ所に残存する。礎石周囲に礫や瓦片を詰めて根固めとする。3棟の建物は存続し、SA13020をとりはらう。

以上、内部に礎石建物を配し、築地で囲まれた官衙の存在が明らかになった。東西規模は250尺（74m）、南北規模はSB13040が西面中央に開くと仮定すると350尺（103.6m）となる。この官衙は、すでに報告されている「兵部」・「兵厨」などの墨書土器や、造兵司や考課に関わる木簡などの周辺の出土遺物及びその位置から、167次調査で推定した通り兵部省に比定される。平安宮の宮城図では朝堂院（八省院）の南面西に兵部省が位置しており、さらに「西宮記」に、兵部省の築地は「片廂」と記されているのは、上記SA13020Bの形式を平安宮においても引き継いだものと理解される。ちなみに、壬生門をはさんで本官衙と対称の位置にある築地の一面は式部省に比定される（165次調査、年報1986）が、やはり築地の内側に礎石列（SB12020）を検出しており、兵部省と同じく「片廂」の廊を設けていたことがわかる。



兵部省地区発掘調査遺構図

兵部省の発見は、八省クラスの官衙としては推定宮内省・同太政官に次ぐものである。その設置年代については、SB11980の礎石掘え付け穴から平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ期に属す土器が、またSB13000の雨落溝からは軒平瓦6721（平城宮瓦編年Ⅲ）が出土していること、また他の出土軒瓦が、第2次大極殿・朝堂院（上層）所用の軒丸瓦6225（平城宮瓦編年Ⅲ）を主としていることなどから、第2次朝堂院の成立と対応して考えることができるが、下層遺溝の存否は、部分的な調査に留まったためなお明らかでなく、今後式部省をあわせた両官衙の内部実態の究明が課題である。

**兵部省北方の調査** 本調査区は、第1次朝堂院南方広場と第2次朝集殿院との間の南北に細長い区域の南辺にあたり、北辺は第1次・第2次朝堂院地区南辺を結ぶ塀あるいは築地によって画される（171次調査、年報1986）。今回の調査で、南辺も築地塀で画す時期があることが判明し、この区画が官衙であった可能性を示した。奈良時代以前の主な遺構には、古墳時代の2条の斜行溝がある。奈良時代の遺構は、4期に時期区分される。

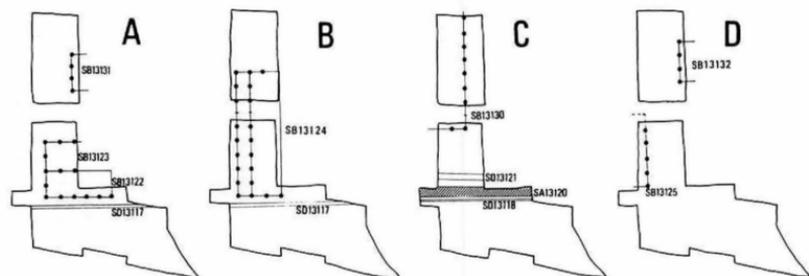
**A期** 調査区南方に東西溝SD13117が掘られ、この北側に建物SB13122・13123が、北方にやや離れてSB13131が建つ。SB13122の南側柱は独立した柵となる可能性もある。

**B期** 桁行9間、西廂付の長大な南北棟建物SB13124が建つ。

**C期** 第2次朝集殿院南辺の西延長位置に、築地塀SA13120が設けられ、北側にSD13121、南側にSD13118が並行する。SD13121は、築地北側の区画の排水路と考えられる。埋土から瓦片が多く出土し、軒平瓦6561（平城宮瓦編年Ⅰ）を含む。北方にはし字型の柱列SB13130があり、塀の一部となる可能性もある。

**D期** 南北棟建物SB13125、その北東に北廂付東西棟建物SB13125が配され、この時、築地塀はとりはらわれていたと考えられる。SB13125柱抜取穴から軒丸瓦6282G（平城宮瓦編年Ⅳ）が出土した。

築地塀SA13120の設置年代は、第1次朝堂院の区画施設が掘立柱塀から築地塀に改作された時期に対応すると考えられるが、土器などの伴出遺物が少なく、その特定は今後の課題である。



兵部省北方地区遺構変遷図

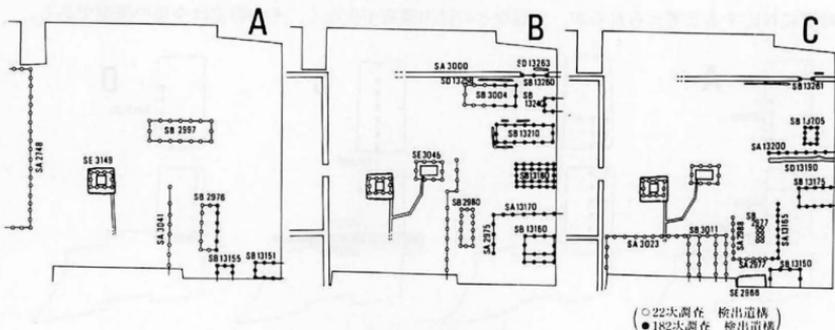
**造酒司地区（第182次）の調査** 平城宮跡遺構覆屋東に駐車場を設けるための事前調査として行なった。内裏の東方，造酒司と推定された第22次（北）調査区の東に接した位置にあたる。以下，22次調査検出遺構とあわせて遺構の変遷を述べる。

**A 期** 覆屋付の井戸 SE3149の東に南北塀 SA3041をへだてて3棟の建物 SB2976・13155・13151が配される。SA3041の北方に桁行7間の建物 SB2997が建つ。周辺北方は空地である。

**B 期** 西隣の推定太政官の区画は築地塀に改められ，その北面延長位置に築地塀 SA3000が設けられて，この地域の北側を画し，2間の門 SB13260を開く。井戸 SE3149の東に，やはり覆屋を持つ長方形の井戸 SE3046が設けられる。井戸の東方には塀 SA3041をへだてて南北両廂付の建物 SB13180を建て，北方築地塀との間に3棟の建物 SB3004・SB13210・SB13240が，南方に，南北棟建物 SB2980，及び塀 SA2975・13170で区画された建物 SB13160が配される。

**C 期** 北面の築地に開く門 SB13261は桁行1間に縮小される。2基の井戸は存続し，その南方に大規模な南北棟建物 SB3011及びそれに接続する塀 SA3023によって一区画が形成される。東方も南側に雨落溝 SD13190を伴う東西塀 SA13200，コの字形に連なる塀 SA2988・2972・13165などによっていくつかの区画に分割され，建物 SB13205・13175・2977・13150が配される。SB3011と SB13150との間には，新たに周囲を玉石列で限った井戸 SE2966を設ける。北方には土壌が掘られ，機能の主部は南方に移る。

以上のうち，造酒司推定を裏付ける遺構として注目されるのは，B期の建物 SB13210の内部北寄りに，南北3列，約1.2mの間隔で設けられた，径30～40cm，断面すり鉢状を呈する29個の小穴群 SX13215である。これは罍を据えた跡と推定される。22次調査で出土した木簡に，このような据えかたの記載（「三條七瓶水四石五斗九升」）を持つものがある（『平城宮木簡二』）。遺物は，北方の土壌を中心に平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ期の土器が，また SB13180の周辺から軒丸瓦 6133・6282及び軒平瓦 6721（平城宮瓦編年Ⅳ）が集中して出土している。従来の知見とあわせ，A期は奈良時代前半に，B・C期は奈良時代後半以降に位置づけられよう。



造酒司地区遺構変遷図

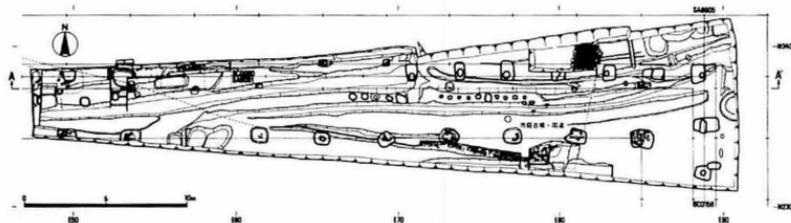
**内裏東北隅（第187次）の調査** バス停留所の上屋改築にともなう事前調査である。現在までの内裏地区の調査成果により、内裏の規模と周囲の区画施設は、1) 一辺長600尺の正方形、掘立柱。2) 北面を30尺、南面を60尺南へ移動、南北長630尺、掘立柱。3) 2) を踏襲、築地回廊。の3期の変遷をとげたことが明らかにされている。本調査区は上記 2)・3) の時期の東北隅部分にあたる。調査の結果、一部後世の削平を受けた場所をのぞいて、掘立柱塼柱掘形と、築地回廊の基壇土、寄柱礎石、回廊礎石据えつけ穴を検出した。

東面掘立柱塼 SA6095は3間分を検出。柱間は10尺等間である。内裏設置当初からの東面区画施設で、調査区内南から3番目の柱から、2) 期の北面掘立柱塼 SA6061が発する。

北面掘立柱塼 SA6061は14間分を検出。柱間は10尺等間で、調査区内西から3番目の柱抜き取り穴から、軒丸瓦6311A（平城宮瓦編年Ⅱ期）、埴などが出土。従来知見の少なかったこの塼の様相が明らかとなり、また遺物によって、次期の築地塼 SC060の築造年代にも手がかりを与えた。

築地回廊 SC060・156は中央棟通りを築地とした複廊で、凝灰岩切石で外装した低い基壇があり、柱は礎石建、築地寄柱にも礎石を備える。東西の SC156は遺存状況が悪いが、北面の SC060には基壇土が30～40cm残存すると共に、礎石据えつけ穴が10間分検出された。柱間寸法は東面梁間に対応する東端2間が13尺（3.85m）、以西は3.95mとなる。築地寄柱礎石は7ヶ所に残り、凝灰岩製で方45cm・厚25cm、中央の方8～12cm、深さ6～9cmの孔を穿つ。寄柱の桁行心々距離は13尺（3.85m）。築地心から柱までの梁間寸法は13尺（3.85m）である。

なお、調査区の西3/4で市庭古墳の周濠を検出した。深さ1.1m、底面は西下がりゆるく傾斜し、素掘のままである。外堤西斜面は、径15～20cmの石を並べて葺石とし、以上に小さめの石を葺く。葺石の方法は、斜面下から上へ径10～15cmの石を一列に並べて区画線とし、その間に径5～10cmの石を敷きつめる。葺石の傾斜角度は約31°である。外堤の西南入隅部分は第11次調査で検出しており、今回の調査とあわせて南面周濠の東西長が約233mであることが判明した。周濠の埋土から円形曲物底板と少量の埴輪片が出土した。



内裏東北隅遺構図

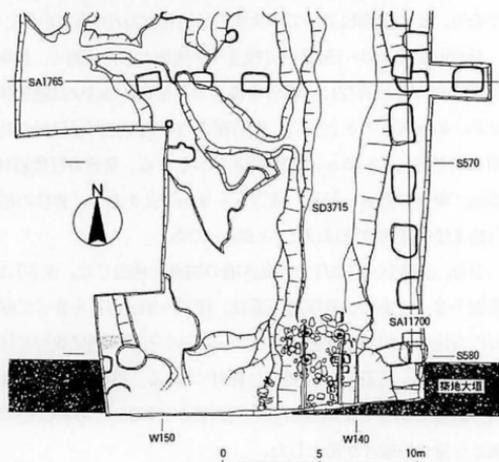
**朱雀門東部（第157次補足）の調査** 第157次調査（年報1985）で行ない得なかった、第1次朝堂院東の大溝 SD3715と、南面築地大垣 SA2000との交点の様相の解明を主目的として行なった。157次調査では、大溝が大垣下を暗渠で抜けると推定したが、今回、大垣下に当たる部分の東西両岸に5本の柱根と護岸の角材、さらに護岸として投げ込まれた石群を検出し、これらの状況からは暗渠の存在は肯定し得ず、大溝は開渠で宮外へと抜けた可能性が高くなった。その場合はここで大垣は途切れていたことになるが、これに代わる何らかの閉塞施設があった可能性を残す。大溝は大きく3時期に分かれ、開削当初は素堀りで、次の時期に大垣部分に柱と角材による護岸を行ない、幾度かにわたって石を投入して護岸の補強をしている。さらに中世以前の時期に石で流路方向を人為的に西に移した形跡がみられる。また、大溝東岸に並行して検出された塀 SA11700は、大垣に近接した位置まで伸びること、この柱を抜き取った跡に、犬走りの築成が、大垣本体と一連の工程で行なわれたことが判明した。この結果、この周辺の主要遺構では、

大垣北約16mの東西塀 SA1765が最も先行し、次いで南北塀 SA11700、さらに築地大垣 SA2000の順となる。SA1765が大垣築造前の宮南面閉塞施設であった可能性が強まったといえようが、この塀は南北に足場穴を伴いながら、柱穴に明瞭な柱痕跡あるいは抜き取り痕跡を留めず、東方にどこまで伸びるかということと共に、解明すべき点を残している。

**平城宮北方遺跡（第183-19次）の調査** 教行寺納骨堂建設に伴う事前調査である。調査地は平城宮西北隅から北方約170mに位置する。検出した遺構は土塁及び東西溝各1である。

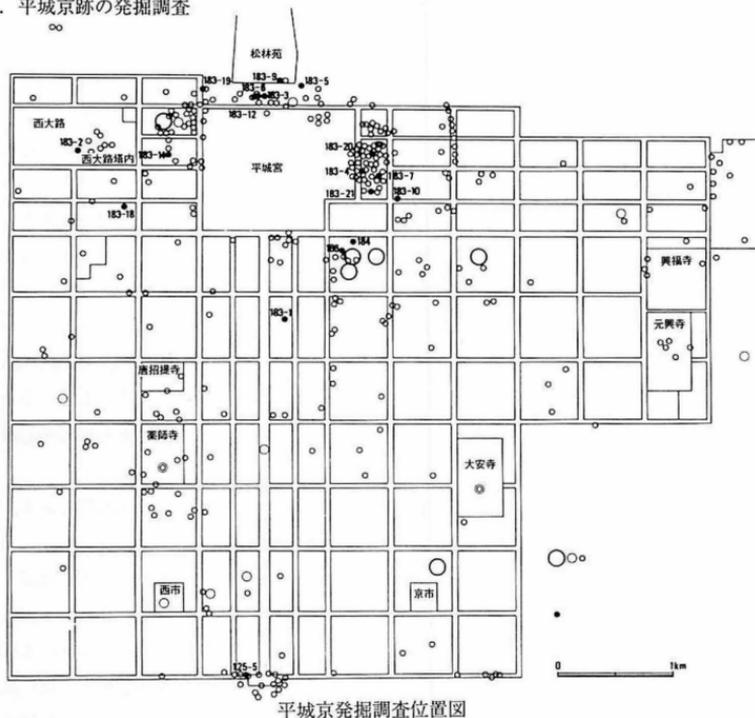
土塁 SX13287は、現状の東西土塁状高まりの南半で約0.8mの積土を確認した。その上に近年の盛土が約0.8mある。旧土塁は堀込地業を行わずに旧表土上に直接積み、版築の形跡はなく、積土中に埴輪を含む。東西溝 SD13286は、調査区西半にあり、幅0.8m、深さ0.8mで、堆積層から埴輪や奈良時代土器・瓦が出土した。土塁の年代については、遺物から古墳時代を上限とすることがわかるのみで、直接の手がかりはないが、1) 北方の佐紀盾列古墳群に関連するもの、2) 東西溝 SD13286を南雨落溝とする奈良時代の築地塀、3) 東方に推定される超昇寺域に係わる施設、などの可能性が考えられる。

（松本修自）



朱雀門東部地区遺構図

## 2. 平城京跡の発掘調査



左京三条二坊一・二・七・八坪（第184次・186次）の調査 「そごうデパート」建設地の事前調査で、約40000㎡の敷地のうち、30000㎡以上を2年半で発掘する計画の第2年次にあたる。調査は、前年度に行なった第178次調査区の北方に接して、約6000㎡の広さで第184次調査区を、さらにその西方と、東西に走る市道をはさんだ北側の2か所に、約5350㎡の広さで第186次調査区を設定して行なった。第178次調査では、奈良時代初めに2町以上の敷地を占める宅地が存在することが明らかとなっており、かつその中心地がさらに北方にあることが推測されていた。今年度の調査により、敷地がさらに4町に広がることが確認され、中心的な建物群を検出することができた。また、調査区の一画にある井戸から「長屋皇宮」と記した木簡が出土し、この広大な敷地をもつ宅地の主が、奈良時代の初めに権勢をふるい、左大臣の地位にのぼりながら、藤原氏の陰謀によって悲劇的な死を遂げた長屋王であったことをほぼ確定できた。それと共に、七坪のほぼ全域を完掘し、二坪の一部にも調査を進めることができ、平城京内の宅地利用の実態の解明に貴重な例を加えることとなった。発掘調査は現在も進行中であり、ここでは1987年度末までに得た知見をもとにして報告する。

検出した遺構は、掘立柱建物117棟以上、掘立柱塀40条以上、溝35条以上、井戸24基、坪境小路2条、及び多数の土塼などである。これらの遺構は全て奈良時代以降のもので、敷地の大小によりA期～D期の変遷をたどる。

**A期** 奈良時代前半である。坪境小路がなく、4町を一体として使っていた時期。長屋の邸宅の時期にあたる。掘立柱塀によって敷地をいくつかに分画し、その内部に大規模な建物を配置する。A期は、さらにA1期～A3期の変遷をたどる。

A1期は、東西塀SA040と南北塀SA030により敷地内を区画する。SA030は第186次調査北区で北への延長を検出しておらず、未調査の市道部分で西方に曲がり、第186次調査西区で検出した塀SA201に続くものと思われる。区画内には、敷地の中央やや西南よりにSB210が建ち、これが主殿になる。桁行7間、梁間5間の南北に底を持つ掘立柱建物で、柱間の寸法は、桁行では中央の5間が10尺、両端間が14尺、梁間は10尺等間となり、桁行の中央3間分に床東がある。身舎の梁間が3間であることから、格式の高い建物である。東脇殿SB160とその東方の南北棟SB150は、南の妻を揃える。SB160の身舎の西の側柱は、条坊計画による二坪と七坪の中心線上にある。他には、SB038、SB058、SB168などがある。

A2期は掘立柱塀による区画と建物配置が一変し、最も整然とした配置となる時期である。敷地内の区画は、南北塀SA120を東限とし、東西塀SA070が南限となる。SA120は、七坪における条坊計画上の東西の中心線上に位置し、第186次調査北区で更に北方に延びることを確認している。A1期で敷地内の区画の北限をなしていた塀SA201はそのまま存続し、それとSA190、SA191、SA200によって通路状の区画をつくる。また、SA070の南には、SA031、SA032、SA033に囲まれた一画が付属し、その中にSB027、SB038がある。SA033は、SA070を越えて更に北に続き、大きな区画内を東西に分ける。西の区画内では、主殿SB210、東脇殿SB160は存続するが、SB150は取り壊され、SB154を建てる。東の区画には、SB066、SB071、SB100、SB101、SB124、SB125、SB1143が建ち並ぶ。SB100は、桁行8間、梁間4間の四面に庇がつく格式の高い建物で、北方の一回り小さいSB101と一体になった双堂形式の構造となる。

A3期は、A2期の配置をほぼ踏襲するが、双堂の後殿SB101を取り壊してSA133をつくり、更にSA090、SA091、SA134などを設けて、敷地内を小さい区画に分割する。それにとりなって多少の建物を建て替える。

**B期** 奈良時代中頃にあたる。各坪の間に坪境小路を設け、1町規模の宅地となる。坪境小路の規模は、側溝心々でSF115が約6m、SF050が約7mである。七坪には、西端やや南よりに二重の溝によって囲まれる方形の区画がある。区画内に設けた施設は検出できなかったが、本来無かったのか、後世の削平によって失われたのかは検討を要する。また、坪の東西の中心線よりやや東には南北溝SD023があり、東西方向の坪内道路SF219まで続く。建物は、小規模なものが散在するだけで、配置に規格性はみられない。それに対し、二坪では桁行7間の大規模な東西棟SB217、SB218が南北に並んでおり、これを中心とした宅地の配置がされると推定できる。





坪境小路西側溝 SD049A には、底に埴を敷いた溝が流れ込んでおり、築地があったと考えられる。また、七坪の SB160 を取り壊した際に、西北隅の柱の抜取り穴を利用して鍛冶炉を作っている。遺存状況は良好で、壁面は堅く焼けており、甕の羽口が原位置を保って出土した。造営に関わる資材を鑄造していたものと思われる。

**C 期** 奈良時代後半にあたる。坪境小路 SF050 が廃され、再び 2 町以上の規模の宅地になる。敷地が 4 町になるかは、今回の調査では確認できなかったが、SF115 の側溝が SF050 と同じく 2 時期あることから、その可能性は否定できない。七坪の北半部と一坪にあたる部分には、小規模な建物が建つ。二坪部分の SB214 は、梁間が 3 間で東に庇があり、発掘区を越えて南に延びる。全体の配置からみて、この時期の中心的な建物は更に西方か北方にあると思われる。また、A 期の主殿 SB210 があった位置に井戸 SE211 をつくる。一辺約 5 m、深さ 3.4 m の掘形の中に、内法 135 cm の横板を方形に 13 段組み上げた井戸枠を置く。底からは、和同開珎 23 点、万年通宝 3 点、神功開宝 12 点が散在して出土した。平安時代の初めまで存続する。

**D 期** 奈良時代末～平安時代初頭にあたる。坪境小路が再び設けられ、1 町規模の宅地になる。二坪には、北に庇の付く SB216 と、その東に SB215 が建つ。SB215 は桁行 3 間以上の南北棟で、妻の柱筋を SB216 の身舎の北側柱と揃える。坪境小路西側溝 SD049B の西には柱穴を 1 間分検出し、ここに門があったと思われる。七坪は、D 1 期と D 2 期の 2 小期に分けられるが、いずれも中心的な建物はなく、小規模な建物が散在するだけである。また、坪境小路側溝 SD048B、SD113B に沿って柱穴列を一部検出し、築地ではなく掘立柱塀で囲っていたらしい。

**出土遺物** 発掘区全域にわたって多種多量の遺物が出土した。その中で、井戸の遺物が注目される。SE108 からは、「長屋皇宮」木簡や、養老年の紀年木簡と共に平城宮土器編年Ⅱ期の土器が出土し、平城京内における土器編年の基準資料となる。また、SE117 からは猿の墨画土器が出土した。硯の下皿に使っていた平城宮土器Ⅱ期の土師器皿 A に描かれたもので、本格的な絵を描く前の下絵とみられる。日本における猿の絵としては最古のものであり、美術史的にも注目される。また、SF115 の路面上の土壌から、100 枚近くの和同開珎がまとまって出土した。紐を通していた状況であり、「差し銭」としての性格をもつものであろう。

**まとめ** 今回の調査によって、左京三条二坊の地に 4 町を占める大規模な邸宅が存在したことが確定し、かつその居住者が出土木簡によって長屋王であることがわかった。平城京の発掘調査は、広い面積を調査することがなかなかできない状況にあり、宅地内の遺構配置が明らかになった例は少ない。また、居住者についても、文献史料から知ることしかできなかった。そうした中で、大規模な邸宅の実態を明らかにし、かつ出土遺物によって居住者が判明したことは、平城京の調査の歴史の中で画期的なことである。今後は、敷地内がいくつかの区画に分割されていたことが明らかとなったので、各区画の性格の検討とともに、周辺の遺跡との関係が課題となる。今後の調査の進展によって、平城京における宅地利用の実態にさらに豊かな例を加えていくことが期待される。

左京二条二坊十四坪（第189次）の調査 店舗建設にともなう事前調査である。調査地は、十四坪の南端部にあたり、東が市道三条・法華寺線、南を国道24号線バイパスに面する。この地は、平城宮東院、法華寺、阿弥陀淨土院などの重要な遺跡に近接し、西南隣の十二坪では一町占地で、複廊をもつ官衙的建物を検出している。また、調査地の東北の第89次調査区でも大規模な建物を検出しており、周辺で施釉瓦が採集されていたことから大規模な宅地の存在が予想され、約1500㎡にわたって調査を行なった。検出した遺構は、掘立柱建物32棟、掘立柱塀12条、井戸1基、土塼、溝、瓦敷などである。これらは、大きく4期の変遷をたどる。

**A期** SB18, SB15, SB13の西の柱列とSA17が柱筋をそろえて建つ。その東にはSB08, SB04, 西にはSB24, SB30がある。

**B期** 調査区東半と西半に遺構が分散して建つ。2間×3間の建物が多い。

**C期** 十四坪の坪内中軸線上のSA21により区画をする時期。更に2小期に分けられる。

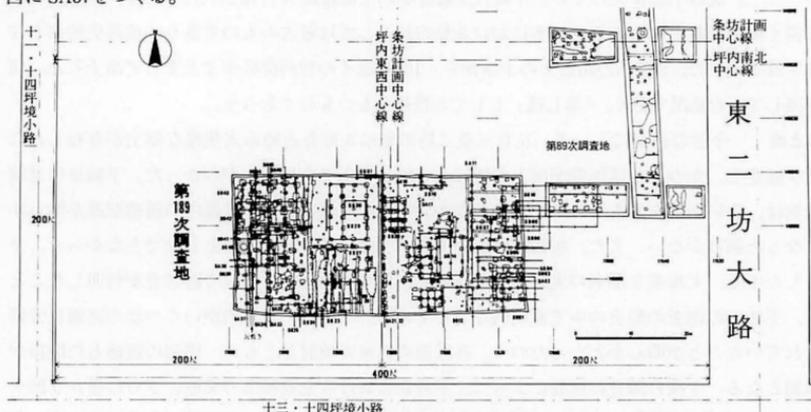
C1期には、SA21の柱間が7尺等間である。西の区画には西庇付南北棟SB29, 東西棟SB39, SB43がある。東の区画には、SB03, SB10, SA19がある。SB10は第89次調査で東妻を検出しており、桁行7間、梁間3間の南庇付東西棟になる。

C2期は、SA21を同じ位置で6尺等間に改作し、建物配置も変える。総柱建物SB20にはSA21が取り付く。西の区画のSB43は、位置をやや南にずらしてSB42に建て替える。東の区画では、SB10はそのまま残るが、SB03を南北棟SB01に建て替える。

**D期** 東西棟SB27と総柱建物SB16を中心とする時期。更に3小期に分けられる。

D1期は、調査区西端にSB41があり、東妻にSA34, 46がとりつく。SB05, SB16, SB27は北の側柱の筋を揃える。

D2期には、SA34, SA45をそれぞれ、SA33, SA47に改作する。SB41は取り壊され、SA33の西にSA37をつくる。



左京二条二坊十四坪発掘調査遺構図

D3期は、SB05を取り壊し、SA02、SA11、SA09による区画をつくる。西には、SB36、SB44が西の側柱を揃えて建つ。SB36の西には、井戸SE40を掘る。SE40は、板の側面をほぼで固定する縦板組みで、平面が正十五角形となる。井戸枠内の最下層から、地鎮に使ったとみられる万年通宝が出土した。奈良時代末に掘られ、平安時代の初頭まで存続する。

**E期** 铸造関係遺物を廃棄した土壌と平安時代以降の溝がある。

**出土遺物** 奈良時代のもものでは、SE40から出土した「酒」墨書土器や、唐草文を陰刻した須恵器が注目される。唐草文須恵器は、杯の身と蓋の破片があり、平城京内からの出土は初めての例である。

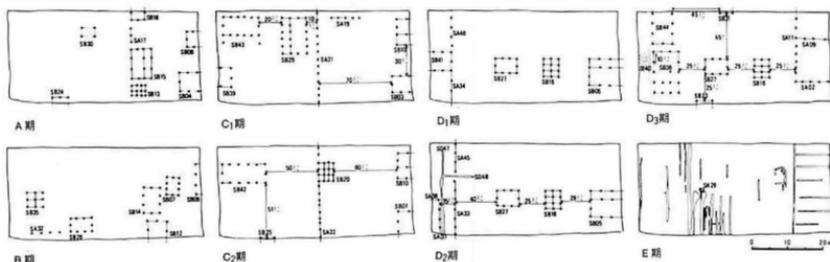
また、奈良時代の整地土の下層をさらに掘り下げたところ、遺構面から約50cm下の砂混じり黄褐色粘土層、青黄褐色粘土層から旧石器が出土した。奈良盆地の低地からは初めての出土であり、部分的に発掘区を設定して調査したところ、3か所に直径2～3mの集中区がある状況が確認できた。剥片には自然面を残すものがあり、剥片同士に接合関係がみられることから、この場所で石器の製作を行っていたと推定できる。組成中にはナイフ型石器をも含み、年代的にかなり古いと見られるとともに、始良火山灰より下より出土したことが注目される。

**左京四条一坊十五坪（第183-1次）の調査** 十五坪の西北隅に近い部分の調査。掘立柱建物5棟、掘立柱塼7条を検出した。これらは、奈良時代から平安時代の初頭にかけて4期の変遷がたどられる。

**右京一条二坊六坪（第183-14次）の調査** 西二坊々間路とその両側溝を検出した。道路の規模は、側溝心々で8.5m、路面幅は7.3mである。

**阿弥陀浄土院跡（第183-21次）の調査** 左京二条二坊十坪の東北部にあたる。西方70mの地で行なわれた第80次調査では、法華寺阿弥陀浄土院に関連する遺構を検出したので、今回も関連の遺構の出土が期待された。調査の結果、掘立柱建物を1棟検出したが、阿弥陀浄土院との関連は不明である。

**右京九条大路・坪境小路（第125-5次）の調査** 九条大路と西一坊々間東小路の交点にあたる。九条大路北側溝の南肩と、西一坊々間東小路西側溝を検出した。



左京二条坊十四坪発掘調査遺構変遷図

### 3. 平城京内寺院の調査

**西大寺境内の調査** 西大寺の防災工事ともなう事前調査である。調査は、護国院東北の貯水槽から東塔跡の東を通り、本堂と護摩堂に至るトレンチを、Ⅰ区～Ⅵ区に設定して行なった。古墳時代から近世までの遺構を確認したが、ここでは主に奈良時代のものについて述べる。

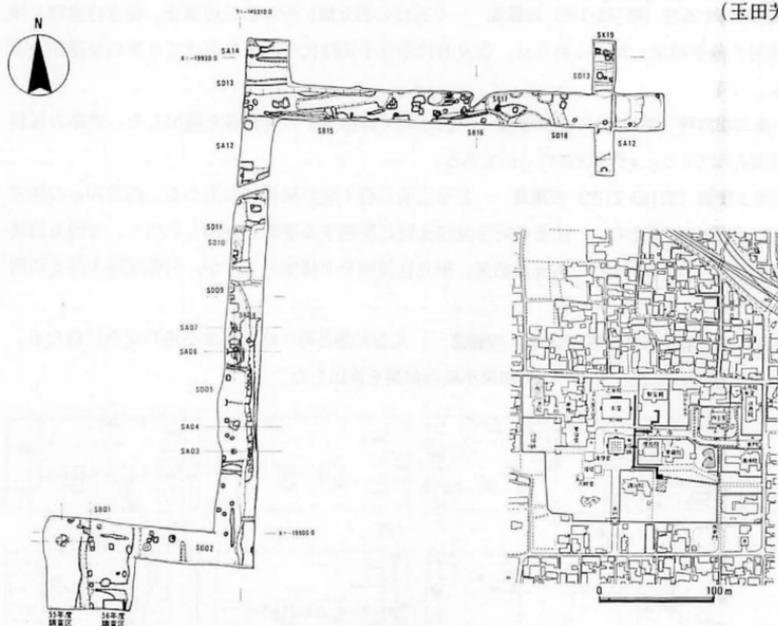
Ⅱ区では掘立柱塼5条、掘立柱建物1棟、築地1条、溝2条を検出した。SD05とSD13の心々距離は19.5mで、西大寺造営によって廃絶した西三坊々間路の両側溝の可能性はある。

Ⅲ区は中央で東西に拡張し、西の拡張区で東塔の八角基壇の掘込み地業の一部を確認した。東の拡張区では築地SA12の北延長部を検出し、北で2度西にふれることが判明した。

Ⅳ区では、埋土に多量の焼土と炭を含む中世の溝を検出した。これは、1502年（文亀2）の西大寺焼亡にかかわる埋め戻し土と考えられる。

本年度の調査により、東塔の基礎地業、西大寺造営以前の右京一条三坊六坪の宅地遺構、西三坊々間路について確認することができた。また、下層に古墳時代の遺構があることもわかり、中世以降の西大寺についても手がかりが得られた。多くの遺物の中では、西大寺創建に関わる軒瓦の良好な資料が得られ、二彩・三彩のものがあることが確認できたことが特筆される。

（玉田芳英）



西大寺境内発掘調査位置図・主要遺構図

1987年度 平城宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査回数	調査期間	調査面積 (㎡)	備考
6ABL-D	平城宮 第157次補	88. 6.10~ 7.10	100	朱雀門東部
6ABL-A・B	平城宮 第175次	88. 5.12~ 7.10	2,100	兵部省
6ALP-G・H	平城宮 第182次	88. 9.24~11.25	1,320	造酒司
6AFN-F	平城宮 第183-1次	88. 5. 6~ 5.20	280	左京四条一坊十五坪
6BSD	平城京 第183-2次	88. 5. 8~ 5.16	90	西大寺西面南門推定地
6ABN-H	平城宮 第183-3次	88. 5.11~12. 5	12.5	平城宮北方遺跡
6BPK-H	平城宮 第183-4次	88. 6. 4	8	法華寺旧境内
6AFV	平城宮 第183-5次	88. 6.10~ 6.11	9.6	平城宮北方遺跡
6AGU	平城宮 第183-6次	88. 6.29~ 7. 1	27	〃
6BPK-E	平城京 第183-7次	88. 7. 6~ 7.10	20	法華寺旧境内
6AFV	平城宮 第183-9次	88. 8.24~ 8.28	16.5	平城宮北方遺跡
6AFE-F	平城京 第183-10次	88. 9.10	130	左京二条四坊二坪
6ACO-F	平城宮 第183-11次	88. 9.10~ 9.16	24	馬寮地区北方
6AGU	平城宮 第183-12次	88. 9.24~ 9.26	15	平城宮北方遺跡
6ADA-K	平城宮 第183-13次	88. 8.24~ 8.25	18	宮内西北隅
6AGA-G・L	平城京 第183-14次	88.10. 2~10.15	150	右京一条二坊六坪
6ADB-K	平城宮 第183-15次	88.10. 5~10.7	18	馬寮地区北方
6ADA-I	平城京 第183-16次	88.10.19~10.21	13	平城宮北方遺跡
6ADA-K	平城宮 第183-17次	88.10.22~10.24	3	宮内西北隅
6AGD-I	平城京 第183-18次	88.10.26~11.14	425	右京二条三坊一坪
6AGU	平城宮 第183-19次	89. 1.21~ 1.26	30	平城宮北方遺跡
6BPK-N	平城京 第183-20次	89. 3. 3	9	法華寺旧境内
6AFF-I	平城京 第183-21次	89. 3.10~ 3.22	94	阿弥陀浄土院
6ACB	平城宮 第183-22次	89. 3.24~ 3.30	12	馬寮地区北方
6AFI-S	平城京 第184次	88. 4. 1~ 9. 6	6,000	左京三条二坊七坪
6ABK-B 6ABL-A	平城宮 第185次	88. 7. 1~ 9. 4	800	第一次朝堂院東南部
6AFI-S・T	平城京 第186次	88. 9. 7~89. 3.31	5,350	左京三条二坊二・八坪
6AAO-S	平城宮 第187次	88.11.24~12.23	350	内裏東北隅
6AFF-C・F	平城京 第189次	89. 2. 1~ 4.15	1,430	左京二条二坊十四坪
6AIM	平城京 第125-5次	88. 7.15~ 7.23	70	九条大路・坪境小路交点
6BSD	西大寺 回数外	88. 7.20~ 8.19	324	西大寺境内